

播磨プランニングラボ

都市計画研究室(太田ゼミ)

キーワード：都市計画，計画演習，高砂市，将来都市構造図，包括連携協定

1. プロジェクトの概要

都市計画研究室(太田ゼミ)では3, 4年生協働で「播磨プランニングラボ(高砂PJ)」に取り組んでいる。当プロジェクトは兵庫県立大学と高砂市との包括連携協定(H29年)の1事業として、高砂市都市政策課の協力の下、高砂市の地域課題解決に向けた具体的な計画提案を学生主体で行うものである。

2025年度は「高砂市の特性を踏まえた将来都市構造図の作成と先導的プロジェクトの検討」をテーマとした。まず基礎調査として既往研究およびヒアリング調査を前提として、兵庫県内の自治体が策定している将来都市構造図を評価した。その上で、設定したテーマに基づき将来都市構造図を作成するとともに、その実現に向けた先導的プロジェクトを検討した。最終的には高砂市長も出席する形で高砂市役所職員の前で発表・提案を行った。活動期間は2025年5月から2026年1月である。

2. プロジェクトの進め方

2025年度のプロジェクトでは、参加した学生8名をA班(となりのタカサゴ)、B班(たかさGOースト)の2班に分け、班ごとに将来都市構造図・プロジェクトを作成した。作成にあたっては、都市計画研究室の学生として、行政・事業者・住民といった多様なステークホルダーの立場を意識しながら住みたい街の将来像を検討し、上位計画との整合性を確認した上で、現実的かつ具体的な提案としてまとめた。

本プロジェクトでは、まちあるきや基礎調査で地域の特性を把握した後、将来像のコンセプトを決定し、20年後の高砂市の生活を想定して将来都市構造図を作成した。図の構成要素である拠点・軸・面の3つの要素を整理し、市民・行政・民間事業者が方向性を共有し、計画や施策を総合的・継続的に進めるための戦略的かつ対話的なツールとして位置づけた。最後に、作成した将来都市構造図を踏まえ、その実現に向けた先導的プロジェクトを提案した。

3. 対象地における現状分析と20年後の将来予想

プロジェクトでは、文献調査と複数回のまちあるきを通じて高砂市の現状分析と将来予想を行った。文献調査では、高砂市の位置づけやまちづくり方針を確認するとともに、GISを用いて人口分布、土地利用、交通網を分析・可視化することで現状の都市構造を把握した。

将来都市構造を検討するにあたり、都市空間を駅まち/住居系/工業系/田園系の4タイプに分類し、空間ごとに現状の役割と将来の方向性を整理した。加えて、現状の取組が強化されなかった場合の将来像をシナリオプランニングで想定することで、現実的な都市構造の方向性を検討し、将来都市構造図が果たすべき役割および重点施策を明確化した。

分析の結果、高砂市の主要資源は「人」と「地域資源」であり、新たな資源の創出よりも既存資源の有効活用が重要であると考えた。これを踏まえ、高砂市の今後あるべき姿として、「人と地域資源を結び、にぎわいと安心が広がる持続可能なまち」を設定した。

4. 将来都市構造図の作成

高砂市の今後あるべき姿を踏まえ、班ごとにまちづくりのコンセプトを設定し、将来都市構造図を作成した。

A班では、「高砂の良好な交通利便性と、溢れ出す人のあたたかさで若者を呼び込むまち」をコンセプトとした。将来都市構造図の作成にあたっては、高砂市の掲げる「プライダル都市」や、幹線道路沿いや駅周辺に都市機能が集積し、生活利便性が確保されている点を考慮した。

現存する将来都市構造図を評価したうえで、拠点・軸・面の追加および削減を行い、図を作成した(図1)。特徴として、「プライダル都市」から着想を得た軸「円むすびん」を設定し、市内各駅を結ぶことで人・もの・場所をつなぎ、市全体の関係性の強化を図っている点が挙げられる。

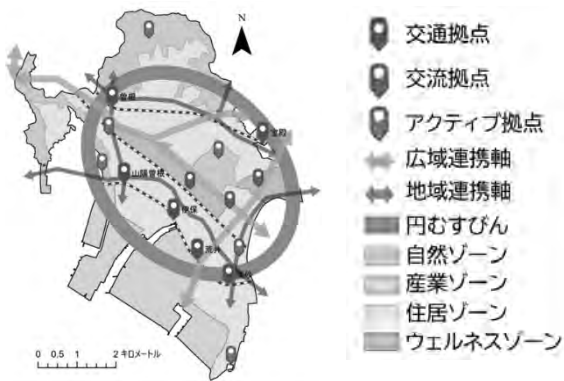


図1 将来都市構造図 (A班)

B班では「つながる・にぎわう・やすらぐまち」をコンセプトとした。その上で高砂市内でのデジタル活用やコミュニティをよくする活動の推進、質の高い緑に着目し、DX・コミュニティ・自然環境をキーワードとして捉え、将来都市構造図を作成した。(図2) このうちDXへの対応を担う拠点として「情報共創拠点」を設定している点が特徴である。情報共創拠点では、デジタル技術の活用を通じて、市民の生活利便性の向上を図るとともに、地域課題の解決を支援することを目的としている。



図2 将来都市構造図 (B班)

5. 先導的プロジェクトの提案

各班の将来都市構造図を踏まえ、これを先導するプロジェクトを検討した。

A班が提案するのは「えんむすび都市」構想である。従来の「縁結び＝結婚」という解釈に限定せず、人・もの・場所などのつながりを広義の縁と捉え、縁結びを促進するまちづくりを提案する。

具体的には、高砂市の交通利便性や人・モノの集積、地域住民の生活基盤としての機能を踏まえ、市内全6駅を拠点とし、人と自然・歴史・情報などを掛け合わせたテーマを設定する。各駅では、緑化や

定期市の開催、交流の場の形成を通じて回遊性と滞在性の向上を図る。これにより、世代を超えた交流や地域の歴史・文化との出会いが広がり、結婚に限らない多様なつながりを育む「えんむすび都市」としての価値あるまちづくりの実現を目指す。

B班が提案するのは「たかさごナビ」の若者への利用促進である。高砂市では、生活に役立つ情報を提供するアプリとして「たかさごナビ」が運用されているが、利用者は30～40代中心であり、若年層の利用は低い。

そこで「たかさごナビ」を核として各拠点を連動させ、意見箱やアンケート機能を通じて市民の意見を活動に反映する循環型の仕組みを提案する。運営には市・高校生、大学生が役割分担して関与し、市は制度設計と実現支援を担い、高校生・大学生は運営補助や情報発信を通じて参画する。この仕組みにより、行政と市民の継続的な関係構築と、双方のまちづくりの推進が期待される。

6. プロジェクトの成果と課題

本プロジェクトでは、週1回の全体会議による学生間の認識共有に加え、月1回の高砂市都市政策課への進捗報告を通じて行政職員から助言を得ながら検討を進めることで、実際の都市政策に近い形で計画立案を行うことができた。また、まちあるきや文献調査により現状を把握したうえで将来予測を行い、将来都市構造図を作成するとともに、先導的プロジェクトの検討を通じて実行段階を見据えた提案としてまとめることができた。

一方で、先導的プロジェクトの運営方法や持続可能性の確保、ならびに現在の施策が長期的にどのような都市像につながるかについて、十分に具体化できなかった点が課題として挙げられる。今後は、行政や住民など多様な主体からの受容性を踏まえ、事業の継続性や運営体制まで含めた検討を行う必要がある。

謝辞

本プロジェクトの実施にあたって、高砂市都市政策課の皆様には大変有益なご助言を頂戴しました。心より感謝申し上げます。また、最終発表会に際しましては、都倉市長をはじめ、多くの職員の皆様にご参加いただき、貴重なご意見やご感想を賜りました。ここに記して深く御礼申し上げます。

(文責：都市計画研究室3年生 樽角咲希)